

工降雨のパイオニア的な仕事である。

### 3. 文献選定の経過, 問題点など

およそ文献というものは音楽の楽譜と同じように無限にあり, その中より客観的に重要なものを選ぶのは至難の業である。また選者各自に専門とか主観的クセがあるので, それらを調整するには, やはり何回も論議してきめる以外にないが, 種々の都合で, 手紙での意見交換の形をとる他に仕方なかった。議論の経過を次に略記する。これは第一次原案よりおとしたものなどについての議論である。①(凝結核) Witt (1960) の夜光雲研究はやはり対流圏が優先という立場より割愛, Woodcock (1953) の巨大海塩核の論文は Friedlander et al. (1965) のエーロゾル粒径分布の論文ととりかえ, ②(雲粒) Mordy (1959) の雲粒成長論は長すぎるので中止, Saffman and Turner (1956) の乱流場成長論は乱流場よりも通常の場が先ということで割愛, その代り Langmuir and Blodgett (1946) の併合計算を取り入れた, ③(氷晶核, 核化) Fletcher (1959) のエントロピー効果は少々特殊と思われ一応除いた, Schaefer (1948) の氷晶発生実験はこの分野として少し古いので中止, Bigg (1953) の過冷却実験も前の文献集にかんがみて中止, 最近の話題と関係のあるものを多く載せた, ④(氷, 雪結晶) ここにはやや古い論文であるが二つを収録, Coriell

et al. (1965) や Mullins et al. (1963) の shape stability の研究は割愛, ⑤(降雨機構) East and Marshall (1954) の乱流場問題は一応中止, その代りに Koenig (1963) を氷化問題として導入, Ludlam (1951) や Langmuir (1948) も載せることができなかった, ⑥(雹生成) List (1960) は1961年の方を採用, ⑦(雲力学) Scorer and Ludlam (1953) はこの分野として少し古いので割愛, ⑧(気象調節) Langmuir et al. (1947) は古いことと, G.E. Report なので中止。

その他, まだ多く割愛のものがあったが, 特に大気電気関係は別に文献集中に項目があるので全面的に中止した, また大気化学, レーダー, 高層気象などの分野についても, 同じである, 雲物理教育の分野は今回は一切ふれなかった。

さらに Technical Note 的なものはほとんど中止したが, ものによって当然導入してもよいと考えた, またロシア語の論文などもかなり含ませる必要のあることを感じたが, これについてはあまり推せんがなかった。

新しく出た論文でとりあげたいものは沢山ある, しかしはじめに述べた理由で割愛した。

なお日本人の関係の論文は一切割愛した, これについては議論があったが, 外国文献集という名称が掲げられているのでそれに従ったのである。

## 長期計画委員会報告

1972年7月 長期計画委員会\*

第16期長期計画委員会(委員長: 窪田正八)は, さる5月の総会において“日本気象学会長期計画(案)——気象学長期計画を実現するために”(本誌19巻7号382頁~384頁)を提案しました。この草案は, 副題にもあるように, 1965年の気象学長期計画(“天気”には第3次草案となっているが, 同年の総会で原案のとおり採択さ

れた)が現時点でも基本的に有効であるが, この計画を実現するためには学会の主体的力量を強化していく必要を強調してかかれています。

したがって第17期長期計画委員会は, これを理事会において学会運営に反映させるようにはかるとともに, 全会員の討論に付し, 各会員の活動およびその所属機関の運営の中に生かしていただくことにしました。

活発な討論と実践を期待します。

\* 担当理事: 駒林誠(委員長), 丸山健人